白道
(びゃくどう)
第226号
発行　願勝寺
企画編集　編集委員会

報恩講(ほうおんこう)ご案内

照井　静志 師

十月二十四日(金)
初逮夜　午後一時半
親鸞聖人のDVD

十月二十五日(土)
大逮夜　午後六時半
御伝鈔　下巻　拝読

十月二十六日(日)
晨朝　午前九時
御満座　午前十時
法話・お斎・他
講師　照井 静志 師

おみがき奉仕
十月十九日(日)午後一時半

二十六日の月おつとめはお休みします

次号は3月発行予定です

父母の恩は一生の恩　仏の恩は永劫(ようごう)の恩

今年は戦後80年の節目の年『あの惨禍の教訓を忘れないために』　原爆パネル展　8/13　願勝寺

報恩講次第

■十月二十四日㈮

初逮夜　午後一時半

◎正信偈　草四句目下
◎同朋奉讃
　弥陀成仏のこのかたは
◎御　文
　大坂建立（四の十五）
◎親鸞聖人のＤＶＤ

■十月二十五日㈯

晨朝兼日中　午前八時半

◎正信偈　中読
◎念仏讃　淘三
　和　讃
　本師龍樹菩薩は　次第六首
◎回　向　世尊我一心
◎御　文
　毎年不欠（三の十一）

大逮夜　午後六時半

◎正信偈　草四句目下
◎念仏讃　淘三
　和　讃
　五十六億七千萬　次第六首
◎回向　我説彼尊功徳事
◎御伝鈔　下巻　拝読

■十月二十六日㈰

晨　朝　午前九時

◎正信偈　草四句目下
◎同朋奉讃
　無碍光仏のみことには
◎御文　鸞聖人（三の九）

御満座　午前十時

◎真宗宗歌　斉唱
◎読　経　三誓偈
　表　白
◎法　話
◎正信偈　真四句目下
◎念仏讃　淘五
　和　讃
　三朝浄土の大師等　次第三首
◎回　向　願以此功徳
◎恩徳讃　斉唱
◎お斎

■十月二十七日㈪

御浚晨朝　午前八時半

◎正信偈　舌々
◎念仏讃　淘三
　和　讃
　不了仏智のしるしには　次第六首
◎回　向　願以此功徳
◎御　文　多屋内方　（二の一）

おみがき奉仕

願勝寺では、報恩講をお迎えするにあたり、本堂仏具のお磨きをしていただいております。

日時は十月十九日(日)午後一時三十分から本堂で行います。

ご奉仕いただける方は願勝寺までご連絡ください。

（52-4698）

初お講

令和八年
一月二十八日
午前十一時半

正信偈・御文拝読・法話の後、御斎（昼食）。皆さんお参りください。

初詣 修正会（しゅうしょうえ）

令和八年
一月一日
午前十時～

お寺の本堂で〝正信偈〟のお勤めをして新年を迎えましょう。
ご家族づれでお詣り下さい。

年忌法要表

令和八年……

1周忌	令和7年亡
3回忌	令和6年亡
7回忌	令和2年亡
13回忌	平成26年亡
17回忌	平成22年亡
23回忌	平成16年亡
27回忌	平成12年亡
33回忌	平成6年亡
37回忌	平成2年亡
50回忌	昭和52年亡

永代経法話

6/1

ここにおいでの方々は誰もが愛する人との悲しい別れ、死別を経験しておられます。それが何十年も前のことだったかも知れませんし、ついこの間の方もおられます。また何人もの方々とのお別れを経験された方もおられることでしょう。

そして、それこそここ一年の間にという方がただ今のお経中にお名前を呼ばれてお焼香をしていただいた方々です。

ところで皆さん。お葬式のことは覚えておられますでしょうか。

どんなお経が読まれたのかおわかりでしょうか。

お葬式のお勤めは今皆さんとご一緒に読みました正信偈を読んでいます。今の読み方は上がったり下がったりなどの節があるのですが、お葬式の時には節をつけずに一本調子で読んでいます。

お葬式のいつごろこれを読んだかと言いますと、お葬式の最中、私たち僧侶が少しの時間だけ立っていたのを覚えておられますか。

その立っていた時に読み始めたのが正信偈です。

ところで、どうして座っていたのにわざわざ立つ必要があったのか。

それは、もともとお葬式は外で立って行っていたからです。

どこでかといいますと、墓地、お墓のところでお葬式をしていたのです。

皆さん方にそんな記憶はありますでしょうか。土葬の時代、あるいは墓地の敷地内に火葬する釜があるような時代です。

私のお葬式の記憶は、私の育った村のはずれにちょっとした山があり、その山の向こう側には自衛隊。各務ヶ原航空自衛隊があるのですが、その山のこっち側にお墓があり、そこに火葬の釜がありました。そこでお葬式をやっていたかのような記憶があるようなないようなという感じです。

もちろんその雰囲気だけが記憶にあって、お勤めがされていたという記憶はありません。

その次の記憶はもう学生時代に手伝っていた時になりますので、その時にはもう専ら自宅でのお葬式でした。

結婚して能代に来てからは、お寺でのお葬式か、平安閣、プラザ、金勇、魚松、ゴンパでしょうか。この辺りのご門徒さんは自宅でのお葬式は少なかったかと思います。

でも、八竜だとか、森岳、竹生、扇田など在ですと専らご自宅でのお葬式です。そして、お葬式が終わるとみんなでまたお葬式の道具一式とご遺骨を持ってお墓へ出かけ、お墓の前に組んであった簡単な祭壇に改めてお荘厳をしてお勤めをし、納骨をしました。

今では在であってもご自宅のお葬式は大変珍しく、専ら葬儀会場でのお葬式となってしまいました。

葬儀会場でのやり方が良いとか悪いとか言っているわけではなく、二〇一三年頃まではみんなご自宅でのお葬式でした。丁度十年位前ですね。しかも喪主は白装束。女の人は白布でほっかむりを

▶イスを並べるのですが「おっとしゃん、抱っこ」

▶抱っこしていてもできる「おっとしゃん、すごい」

「おっとしゃん、片手では袋詰めできないかぁ」

して納骨に出かけました。

つまり、本来喪服は黒でなく白だったのです。そして、お墓に葬式道具を持っていくというのは、もともとお葬式はお墓でやるものだったからです。

だから私たち僧侶方はその名残で五分位だけ立ってやっているのです。最後まで立ってやらないのは疲れるから、あるいはご参詣の皆様方はみんな座っているからなんでしょう。それ以外は考えられないです。

東本願寺に勤めていました時に、本山の代表として東京八王子辺りのお寺のお葬式にお参りしたことがありました。六月か七月の暑い中、本堂でずっと立ったままでした。

あれっ、このタイミングで座らないのぉ。えぇっ、まさか最後まで立ってお勤めするのですかぁ。このままだと誰か一人くらい倒れるのでないかなぁと思いながらのお葬式でした。

結局最後の最後まで立ちっぱなしの大変つらいお葬式でした。

本来お葬式は、大雨であろうが大雪であろうが三十度越えのカンカン照りの炎天下であろうとも外でお勤めするのが当たり前ですから、葬儀の時間は二十分かからない位と非常に短いわけです。長いと、それこそ葬家の方々も僧侶も参列者も倒れてしまいますから、お葬式の時間は短くて当たり前なのです。

いつも受け付けありがとうございます

お葬式のお勤めは、まず出棺のお勤め、出棺勤行から始まります。

ご遺体はまだご自宅にありますので、そこでまず出棺のお勤めをします。出棺のお勤めというのは、さぁ、これから自宅を出てお葬式をしに墓地へ出かけていきますよというお勤めです。

あるいは、このお勤めをお棺の前でのお勤めという棺前勤行とも言いますし、ご遺体とのお別れという意味でのお別れ勤行とも言います。

この出棺勤行・棺前勤行・お別れ勤行と墓地・葬場でのお勤めの二つを合わせてお葬式のお勤めと言います。

ですからお葬式のお勤めは、まずご自宅での出棺勤行から始まり、そして墓地へ移動して野卓の前での葬場勤行となります。

野卓と言いますのは、八竜だとか、森岳、竹生、扇田などでの納骨の時のお墓の前に組み立てた簡単な祭壇のことです。

前住職のお葬式の祭壇は机一つ。私がここ本堂で作る祭壇は二段の本当に簡素なものです。

本来お葬式は外でみんなが立ったままでやっていたのですから簡素なのは当たり前です。

それが今のお葬式のやり方は、私達僧侶は最初は座ってお勤めをするのですが、途中で立ちあがり磬がカンカンカンカンといっぱい鳴って、私がお焼香をしてから正信偈のお勤めが始まるという具合です。

そのままずっと立ってお勤めをするのが本来なのでしょうが、そんなことをすると倒れてしまうかもしれませんので、一分ほどでまた座るというやり方になっています。

それと、今では墓地でのお葬式はないでしょうから、さぁこれからお葬式に出かけますよというご自宅での出棺勤行・棺前勤行・お別れ勤行も葬儀会場で行われます。

この辺りはお葬式の前に火葬をしてしまいますので、火葬の前にお勤めする出棺勤行は本来のお勤めでなく、願勝寺では正信偈を読んでいます。

ですから、昔の、本当に昔のご自宅での出棺勤行は葬儀会場で私達が立ち上がる前、私達僧侶が葬儀会場に入って一番最初に読まれるお勤めが出棺勤行・棺前勤行・お別

司会進行を交えて打ち合わせ

荘厳をいたします

で読むお経、今日は分かりやすくお経と言いますが、お勤めをしているお経の内容に今も昔も変わりはありません。

まず最初にいわゆる出棺のお勤め、お棺の前でのお勤め、棺前勤行がお勤められます。

このお勤め、お経は、お釈迦様でも親鸞聖人でもなく、正信偈の中に出てきます七高僧、親鸞聖人がお釈迦様の教えがインド・中国から日本に伝わり、この私にまで届くことになったという七人のお坊さんの内の五番目の、中国の善導大師がお書きになった「仏説観無量寿経」の注釈文「観無量寿経疏」の冒頭の部分の偈文が読まれます。

これを「勧衆偈」と言います。

『道俗時衆等　各発無上心　生死甚難厭　仏法復難欣　……』と読まれるのですが、この一文の前に実はもう一行がありまして、それは『先勧大衆　発願帰三宝』という一文です。

これを親鸞聖人は「まず大衆を勧む。願いを発して、三宝に帰し」と読まれます。

「勧衆偈」といいますのは、「大衆に勧める偈」です。「先勧大衆」から名づけられています。私達大衆に何を勧めるのかと言いますと、この「勧衆偈」を別名『帰三宝偈』と言うのですが、これは「発願帰三宝」から名づけられています。

また、この偈文は五文字づつ四句を一行にして十四行からなっていますので「十四行偈」とも言います。

で、『帰三宝偈』は、仏・法・僧の三宝に帰依する偈。願勝寺の本堂の向かって左側の右手におられますのは聖徳太子です。人ひとりが描かれているお軸の方です。

左手に掛かっています七人が描かれていますのが先ほどの七高僧の方々です。

右手に掛かっていますのが聖徳太子。聖徳太子といえば日本に仏教を弘められた方です。聖徳太子で有名といいますか、中学の社会の教科書に出てきますのが、十七条の憲法です。その十七条の憲法の二つ目、第二条が「篤く三宝を敬え」です。

一つ目は「和をもって貴し」、「和らかなるをもって貴しとする」。簡単すぎるかもしれませんが「争うことはやめましょう。みんな仲良くしましょう」でしょう。

そして二番目が「篤く三宝を敬え」です。聖徳太子はお釈迦様の教えを取り入れることによって、日本の国をみんなが住みやすい国にしていこうと考えられたのです。

三宝というのは仏・法・僧の三つ。仏様と、その仏様の教え、そして仏様の教えを聞き伝えようとする僧侶たちのことです。

この三宝に帰依しましょう。仏・法・僧の三つを頼りとする。この三つをこれからの生活の道しるべとして生きていましょうというのが、『帰三宝偈』。

つまり私達は、仏教徒になっていきましょうと勧める偈をお葬式の最初

永代経志進納者法名軸

で、今日はそのお話をしたいと思います。

昔も今も一連のお葬式

これ勤行に当たります。

さぁ、やっと本題に入っていきます。

さて、私たちはどのような心持でお葬式をするのか。

今更あえてこんなことを言わなくても、皆様方のその時のお気持ちで全く問題がないわけなのですが、お葬式のお勤めの内容を考えると「えぇぇぇっ、そんなふうになっているの」と思えることがありますので、

に読んでいることになるのです。

亡き人を縁としてそこに集ったものがともに仏教徒になっていこう、亡き人が仏様となってこの私に仏様の教えを聞いていきなさい、仏弟子となってくださいねと願い勧めていてくださっているのです。

それこそ、法然上人がお亡くなりになられた時の親鸞聖人たち、お弟子さんたちへの遺言、「自分の亡き後は、追善としての仏事はしてくれるな。しかし、もし私のことを思ってくれるのなら、念仏相続のための仏事をしてほしい」という遺言が、私たちのお葬式での第一声、「勧衆偈」「帰三宝偈」の頭、『先ず大衆を勧む　願いを発して　三宝に帰し』と、亡くなられた方が仏様となって、そこに集った私たちにまず言わなければならないこと、伝えておかなければならないことは、「仏様の教えを聞いていきなさい。仏弟子となって念仏相続してくださいね。」と言っておられるのではないかと私は思っています。

法名軸の前でのお焼香から始まります

実は、先月の十日に前住職　正順（二〇〇九　H二十一、七、九）の十七回忌法要と共に、前々坊守、覚えておられる方もおいでしょうが、前住職の母、黒石の感隨寺様からおいでくださいましたフサ（一九八〇　S五十五、一、二十八）さんの来年一月二十八日を少々取り越しての四十七回忌法要。そして、第十六代住職　忍超さんの一年遅れての百回忌法要（一九二五　T十四、二、十七）をお勤めいたしました。

その前の前住職の十三回忌はコロナの中の二〇二一年七月四日にお勤めしましたが、今回は、覚の連れ合いで准坊守の百佳。私の二男　開の連れ合いの美晴も加わり、そして覚と百佳の間に慧登が授かり、加えて百佳のお腹には第二子まで授かっております。

そして、黒石からお参りくださいました感隨寺様からは慧登と同級生となる健心君もお参りしてくれました。お勤めの最中には健心君の手には赤本がありました。

このたびのご法事は実に念仏相続のご法事となったなぁと思ったことでした。

永代経ではお経がお勤めされます

話を戻しまして、私たちはお葬式をお勤めすることによって、亡き人の菩提を弔おう（ちゃんとお浄土に往けるよう願う）と思っています。

これはこれで間違いのないことですし、それを否定することはできませんが、このことは、私から亡き人へという方向ですが、このこと以外にもう一つ、亡き人から私にという方向があるのです。お葬式の第一声は亡き人が仏様となって私たちに呼びかけている言葉、願いから始まっているのです。

ところで、ちょっと話は変わりますが、私は毎日ＮＨＫの朝の連続テレビ小説を見ています。

ちょうど一年前（二〇二四　R六、三～九月）に放映されていたのは「虎に翼」でした。日本人初の女性弁護士、判事、裁判官となった三淵嘉子（みぶちよしこ）さんをモデルにしたドラマです。

まだ女性には開かれていなかった弁護士・判事になるために、明治大学の法学部に入る。しかし、法律を勉強したところで、まだその採用試験を受けられるのかどうかもわからないような時代です。

三淵さんは自分の道は自分で切り開けというタイプの人のようで、見事自分の道を歩み、夢をかなえることのできた人でした。

主人公、トラの歩もうとする道は未だ誰も切り開いたことのない厳しい

道です。その道をトラの母は、地獄の道と例えるのです。

そのドラマの最終回、九月二十七日の放送回。亡くなった母がトラの前に現れます。トラの本名は「トモコ」というのですが、亡き母が「トモコ、どう地獄の道は？」と訊ねます。

すると訊ねられたトラ・トモコは「最高です！」と応えるシーンがありました。

それを見て私は、「うーん」です。

そうか、いつか自分の命が終わるころ、いつもどんな時も私のことを四六時中見守っていてくれた母が、夢か何かに出てきて、「正規。どうだった、あなたの人生は？」と訊ねに来るのかと思いました。

まぁ、こんなことは誰も経験していないことですのでわかりませんが、もしそうであるならば、その時に私はやはり、「最高でした。ありがとうね。ずっと見守っていてくれてありがとう」と。

それこそ、「産んでくれてありがとう。楽しかったよ。あなたの子どもでよかったよ。私の妻があの人でよかったよ。私の子どもがあの子たちでよかったよ。私の友達があの人たちでよかったよ。みんなあなたのおかげです。楽しい人生をありがとう。産んでくれてありがとう。」と言いたいものだなぁと思いました。

私たちは、誰もがみな、自分の人生を振り返った時に、「最高でした。お母さんありがとうね」と応えなくてはならないのでないかと思います。

もしそうでなかったら、そう応えられないような一生、人生であったなら、私自身にも、両親にも、妻にも子にも、私の周りの人、私にご縁のあった人達、全ての方々に申し訳がないのではないかと思うからです。

「私の人生、最高でした」と応えること。それが母の大恩、両親や私にご縁のあった方々のご恩に報いることでないかと思います。

そのためにはどうするか。そのためには、「一生懸命に生きる。今を一生懸命に生きる。具体的には、今やること、今やらなければならないことを一生懸命に、今する」ということが大切なことでないかと思います。

そして、もう一つ思ったことは、私の亡き母・亡き父は命終えてもずっと私のことを見ていてくださる。ずっと私にエールを送っていてくれているということです。

親鸞聖人の教えを私はこのように思っています。四年前（二〇二一年）の永代経でお話した往還二回向です。

赤本二十二ページ三行目に出てきます。「往還廻向由他力」の「往還廻向」です。

往還二廻向とは、往相の廻向と還相の廻向です。親鸞聖人の著作「教行信証」の一番最初の序文・前書きの後の本文の冒頭に「謹んで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。」と出てきます。

つまり、親鸞聖人がまず最初に言いたかったこと、とにかくまず一番先に言っておかなければならなかったことは、「浄土真宗には二つの回向があるということ、そして、それは往相の回向と還相の回向である。」ということだったのです。

親鸞聖人は、「浄土真宗には二つの回向（差し向ける。回し向ける。こっちからあっちへ）がある。どっちか一つの回向だけではダメ。どっちか一つだけでは浄土真宗とは言わない。往相の回向と還相の回向の二つがあってはじめて浄土真宗」

ご遺族様方のお焼香　70 名程でお勤め

のどの調子が思わしくないというので住職が御文拝読

だと言っておられるのです。

で、その往相の回向と還相の回向はなにかというと、まず、

往相の回向とは、私たち凡夫が阿弥陀の浄土に往生することを往相回向といいます。

この迷いの世界、苦しみの世界、自分勝手な者ばかりが充満している世界、争いがたえず、憂いがたえず、悩み多き世界に生きている私が、阿弥陀の浄土、極楽浄土、安楽浄土、安養浄土に生まれさせていただく、これが往相回向。

では、還相の回向とは、そのお浄土からまたここへ帰ってくるというのです。

自分が浄土往生するだけなら、自分だけのことです。浄土真宗では、自分だけのことを考えてはいけないのです。浄土真宗では、自分のことだけでなく、他の者のことも考える。

ですから、浄土往生したならば、今度は他の人たち、残してきた人たちを浄土往生できるようにする。（これは皆さんの嫌いな友引みたいなものです）

往相回向とは、私たち凡夫が阿弥陀の浄土に往生すること、つまり、この辛く苦しい世界、迷いの世界から、阿弥陀の安楽浄土、安養浄土、極楽浄土に往生することを往相回向といい、還相回向とは、反対にお浄土に往ったものが仏となって、私たち迷い苦しんでいる衆生を救いとって下さる。私たちを浄土往生させるために亡くなった方が仏となってこの世界に戻ってこられることを還相回向というのです。

つまり、私が浄土往生するだけでなく、他の人々のことも考える。自分も他の人もみんなが浄土往生する。これが浄土真宗だと親鸞聖人はいうのです。

この二つがあって浄土真宗です。

亡き人、仏様にとってみれば還相。お浄土から仏様となって衆生救済のために戻ってこられる。でも、これらのことは全てが他力。他の力。私の力、自らの力でなくて他の力。「往還廻向由他力」です。

「往還二廻向」は全てが仏の力、阿弥陀様の力。浄土真宗では自分がお浄土へ往く。そして自分がお浄土へ往って仏様となったら今度は自分の周りの人を連れて行くのです。

浄土往生し、またこの苦しみの世界に戻って人々を救いとるのです。

亡くなってしまった人は、もうここにはいない、肉体はないけれども、その人の願いや思いは私の心の中で生き続ける。

亡き人は、命終えた後、仏様となってずっと私のことを見守っておってくださる。ずっと私にエールを送り続けながら私に何を願っておられるのか、その人の願いや思いをしっかりと受け継いでいかなければならない。忘れてはならない。

そうすることによって、亡き人と共に生きていくという世界があるのではないかと思います。

親鸞聖人の著作「教行信証」の最初には、「謹んで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。」と出てきますが、では「教行信証」の一番最後にはどんな言葉が出てくるのかといいますと、こんな言葉が出てきます。

前後を割愛しますが、『…前に生まれん者は後を導き、後に生まれん者は前を訪え…』とこのように出てきます。

なんとなく意味は解りますでしょうか。

この言葉が、親鸞聖人が最後に言いたかった言葉です。

「前に生まれた者」とは「先にお浄土に生まれた者」ということです。前に生まれた者は後の者を導きというのが還相回向。

赤本を持って
ボクにも教えが伝わりました

「先勧大衆　発願帰三宝」

後に生まれた者は前の者を訪えというのが往相回向です。

「仏様の教えを聞いた者、仏法に出遇えた者はその喜びを次の人、後に生まれてくる者に伝えてください。後に生まれた者は先輩方に教えを請いてください」です。

もう一度確認します。

私たちはお葬式をお勤めすることによって、亡き人の菩提を弔おうと思っています。これは間違ってはいないと思います。

でも、これは私から亡き人へという方向です。でも、このこと以外にもう一つ、亡き人から私にという方向がある。

それが証拠に、私たち浄土真宗のお葬式の第一声は、亡き人が仏様となって私たちに呼びかけている言葉、仏様となった亡き人からの願いから始まっているということです。

お葬式の弔辞やお別れの言葉を聞いておりますと、一般的には「これからもずっと私たちのことを見守っていてください」と私たちから亡き人に対して願っています。

でも、亡き父・母は仏様となってこちらが願わなくても大慈・大悲の仏の心でものうき（怠り捨てる　倦　あきることなく）ことなく常に私を照らしてくださっているのです。

翻って、亡き父・母はそうであるけれども、それに比べてこの私はどうか。

極まれにですけれど、ご門徒さんが亡くなられた時の枕勤めの時や、電話ででも、葬式は家族だけで簡単に、また、葬式はしないで納骨だけで済ませたいと言われる方が本当に極々たまにいらっしゃいます。

皆さん方、えっっっっっと思われるかもしれませんが、たまにこういう電話をいただいたり、枕勤めの時に言われたりするのです。

他には、「今時七日七日なんてやっている人いるのぉ」、「別にやらなくったっていいじゃない。ねぇ、お母さん。」と、夫を亡くして今は何も考えられない母に、子どもたちが相槌を迫ったり、ご親戚の方がお身内の方に代わってかどうかは解りませんが、言われたりします。

葬式、七日七日とくれば、ましてや法事も同様です。「別にやらなくったっていいじゃない」という感じです。

三十年ほど前、「人は死んだらゴミになる」と言った人がいます。伊藤栄樹さんです。元検事総長・東京高検検事長・法務事務次官で「ミスター検察」と呼ばれた人です。

どうでしょうか。人は死んだらゴミなのか。

事実を見れば、人は死んだらゴミになるのではなく、人は死んだら骨になる。灰になるでしょう。これであれば否定はできません。

でもゴミはダメでしょう。骨や灰は事実ですが、ゴミはその物を見る価値観です。ゴミは無用なもの、不必要なものの代名詞です。

ということは、人は死んだらもう無用なもの、不必要なもの、捨てるべきものだと言っていることと同じになります。

こうなれば、ほんの一握りの人の極端な考えなのかも知れませんが、葬式も七日七日も法事も別にやらなくったっていいじゃないということになっていくのでしょう。

人間の最後がゴミ、無用なもの、不必要なもの、捨てるべきものであるならば、私たちはゴミへの途中を生きているということになります。

これではやはり、この考えはどうみてもおかしなことではないのかと思います。

亡き父母は、この私に「豊かな人生を送ってください」と願っておられずはずです。

「どうせ人は死んだらゴミなのだから、私の葬式はしなくていいよ。七日七日も法事もしなくて

お爺ちゃんのお話し面白くなぁーい

お斎を皆さんにお配りします

いい。お骨はその辺に捨ててくれればいい。そしてあなたは自分の好きなように自分勝手に生きなさい。」と、こんなふうに父母は言われないでしょう。

亡き父母が目の中に入れても痛くないこの私に掛けてくださっていた願いを改めて訪ねる、聞く。時折そのようにしてみる。

命終え、お釈迦様の亡くなられた時の姿を法然上人も親鸞聖人も真似られた。そして私たちも仏教徒として命終えることができましたと頭北面西右脇、つまり北枕に寝かせてもらい、葬式に向かう自宅での最後のお勤め、今のお葬式のやり方ですと、葬儀会場での最初のお勤め、勧衆偈で、まず三宝に帰せ、仏教徒になってくださいねと、残していく者に訴えておられる。呼びかけている。私たちは亡き人から最後の最後まで願われているのです。

このことをまず私たちが知る、確認する、ということが大切なことではないかと思います。

お葬式会場で最初に読まれる勧衆偈ですが、その偈文の一番最後の一行、四句は皆さん誰もが知っている言葉です。今日も読みました。いつもお勤めの最後に読まれる盤が三つなるところです。

「回向」と言いますが、『願以此功徳　平等施一切　同発菩提心　往生安楽国』です。聞いたことあるでしょう。ここで盤が三つ鳴って「あぁ、終わりだぁ」と思うところです。

お葬式会場で最初に読まれる勧衆偈の一番最後で、仏様は私たちみんなに、阿弥陀の浄土、極楽浄土、安楽国に生まれることを願っておられるのです。

最後にもう一度。

聖徳太子がお釈迦様の教えを取り入れることによって、日本の国をみんなが住みやすい国にしていこうと考えられたように、私に先んじてお亡くなりになられた父母、お連れ合い、お友達が仏様となって、三宝に帰せと。仏教徒となって、仏教、お釈迦様の教え、親鸞聖人の教えにより、人間作りをしていってください、豊かな人生を送ってくださいと願っておられる。

そして、日を置き、年を置いて、一周忌、三回忌、七回忌、十三回忌、十七回忌とご法事をお勤めする。しかも、そのご法事は、私たち勤める側にしてみれば、亡き人のためと思いながらも、実は亡き人たちが私たち残してきた者のことを思っておられるということ。

その願い、思いを訪ねることがご法事を勤めることの意義だと思います。

大好きだった人が亡くなり、残していく者への最後の願いが仏法を聞いてくれ。そして、誰も代わることのできない唯一つの、あなたの人生を悔いなきように明るく活き活きと豊かに生きていってくださいとの願いを確かに聞く。

そしてまた時折ご法事という形をとって、改めてそのことを確認していく。このことが今の私たちにとって大切な心持ではないのかと思います。

『汝起ちて更に衣服を整え　合掌恭敬して無量寿仏を礼したてまつるべし』です。

こういう気持ちが大切でないかと思うこの頃でございます。

今日のお話はここまでです。

この後お斎となります。隣でいただきますので、どうぞ私にいっぱい質問をしてください。

今日はお参りありがとうございました。

お斎の時間には質問も出ます

お斎の後、絨毯の片付け　お掃除
最後の最後までありがとうございました

お盆のお話

8／13

熊本、長崎などの大雨が気になるところですが、お暑い中ようこそお参りくださいました。

さて、一週間前の八月六日は何の日だったでしょうか？

八月六日は広島に原子爆弾が投下された日です。一九四五年、昭和二〇年八月六日午前八時十五分、広島市上空六百メートルで原子爆弾が炸裂。人類史上初の核攻撃により一瞬にして十何万人という方が亡くなり、その年十二月末までに十四万人が死亡したと推定されました。八月六日現在、広島原爆死没者名簿には34万９２４６人の方が記載されています。

8/3　お墓掃除に引き続き、お磨きをしてくださる

そして、八月九日は長崎に原子爆弾が投下された日です。一九四五年、昭和二〇年八月九日午前十一時二分、長崎市上空五百メートルで原子爆弾が炸裂。人類史上二回目の核攻撃であり、実戦で使用された最後の核兵器によりその年十二月末までに長崎市民の三分の一にあたる７万４千人もの方が亡くなられました。八月九日現在、長崎原爆死没者名簿には20万１９４２人の方が記載されています。

8/12　前日の準備　青い空

全国の被爆者の数は今年初めて十万人を下回り、被爆者なき時代が近づいていますが、被爆された方々は今もなおその後遺症に苦しめられており、その人たちにとっての戦争は未だに終わってはいません。

八月六日もそうですが、九日もその時間に平和祈念式典が行われました。それは、「被爆の悲惨さを忘れない」、「核兵器は存在してはならない」、「長崎を最後の被爆地に」という長崎市民の平和への願いを世界に向けて発信するための式典です。

そして八月十五日にやっと日本は負けを認め敗戦、終戦となりました。

この八月六日、八月九日、八月十五日の三日に加えて、六月二十三日の平和を祈る日「沖縄慰霊の日」も忘れてはなりません。

沖縄での民間人を巻き込んだ地上戦により、沖縄県民の四人に一人が命を落とし、日米両軍、民間人合わせて二十万人が犠牲となりました。沖縄の防衛にあたっていた日本軍司令官の牛島満中将やその部下たちが自決したことによって、旧日本軍の組織的な戦闘が終わったとされる六月二十三日を沖縄では、「平和を祈る日」、沖縄慰霊の日としています。

私も一九九二年か一九九三年のその日、梅雨が明けるかどうかという天候の中、東本願寺の代表としてひめゆりの塔の前で式典に参加し、ひめゆり平和祈念資料館や平和の礎などを見学したこともありました。

この六月二十三日も忘れないようにしなければと思います。

8/13　30人ほどで朝８時からのお勤め

今年のお正月にもお話いたしましたが、昨年十二月、世界に被爆の実相を伝え人類の危機を救おうとする「日本原水爆被害者団体協議会」（日本

被団協）がノーベル平和賞を受賞しました。

その授賞式での日本被団協の代表委員である田中熙巳（てるみ）さんが演説の最後で、「人類が核で自滅することのないように。そして、核兵器も戦争もない世界の人間社会を求めて共に頑張りましょう」と訴えました。

もう三年半になろうとしますが、二〇二二年二月二十四日、ロシアがウクライナに軍事侵攻し、プーチンは核兵器の使用を示唆して威嚇を続け、世界中にその脅威が高まっています。

同年八月、国際連合事務総長　アントニオ・グテーレスは「人類は広島と長崎の惨禍の教訓を忘れつつある」と発言をしました。

また中東では、二〇二三年十月にパレスチナ自治区ガザで、イスラエルとイスラム組織・ハマスの大規模戦闘も始まりました。

住職からお話

おととい十一日朝のニュースでは、イスラエルがガザへの戦闘を強めると報道されましたが、イスラエルと仲の良いアメリカのせいで国連安保理もなんともできないような状況です。

今年の五月には核保有国であるインドとパキスタンの軍事衝突が発生。停戦合意に至ったものの、核保有国同士の衝突をめぐり国際社会に緊張が走りました。

そして六月には、核開発を進めるイランに対して、イスラエルがイラン各地にある核関連施設などを攻撃しました。

そのイスラエルの攻撃に続いてやはりアメリカが、イランによる核の脅威を阻止するためとして、イランの核施設を爆撃しました。

トランプ大統領はこの攻撃について、「あの攻撃が戦争を終結させた。広島を例として使いたくない。長崎を例として使いたくない。しかし、本質は同じだ。戦争を終わらせた。」と発言。また同日「広島や長崎をみればあれが戦争を終わらせたことが分かる。これは違う形で戦争を終わらせた。」と広島や長崎への原爆投下を正当化する発言をしました。

今もなお、戦火に怯え恐怖と悲しみの中で生活をしている人たちがいます。今日も人が人でなくなり人が人を殺すという戦争が行われています。

今年は戦後八十年の節目の年です。戦争の歴史を学び、今後日本がどうあるべきかを考え、戦争の惨禍が二度と繰り返されることのないようにしなければなりません。

お釈迦様のご説法『仏説無量寿経』下巻の終わりあたりには「兵戈無用（ひょうがむよう）」と出てきます。今から二千五百年も前のお釈迦様在世の頃からずっと戦は続いていたのでしょう。

ですからお釈迦様は「武器も軍隊もいらない」と世の平和を願っておられたのです。

原爆パネル展を実施

「兵戈無用」。武器も軍隊もいらない。人が人でなくなり人が人を殺すような戦争はしてはいけない。人も地球も滅んでいくような核兵器は使ってはいけない。使うことが許されないような核兵器は持ってはいけない。作ってはいけない。核なき世界、争いのない世界を願いたいと思います。

八月六日の広島平和祈念式典で、こども代表の「平和への誓い」の中で『周りの人たちの為にほんの少し行動することが、いずれ世界の平和につながるのではないでしょうか。』と訴えました。

そして、願勝寺には「世界中の人々がもう少しやさしくなればこの世界はもっと良くなる。この世界がやさしさに包まれますように。」と掲げ

お墓でのお勤め　風はある

てあります。

だいたいこれでお話は終わりなのですが、「あれっ、お盆の話は？」と思われた方の為にもう少々つけ加えます。

お盆の起源と言われている目連と目連のお母さんのお話です。

お釈迦様のお弟子の目連は神通力を使って、亡くなった母が今はどこでどうしているのだろうかと探すことにした。すると、なんとお母さんは地獄に堕ちていたのでした。目連は、地獄に落ち身体がやせ衰え飢えてしまっている母に食べ物を差し出すのですが、食べ物が口元までいくと、なんと食べ物は火となってしまい母はそれを食べることができません。

その様子を目連はお釈迦様に伝えどうしたら餓鬼道にいる母に食べ物を与えることができるのかをたずねたところ、お釈迦様は、「多くの修行僧の方々にお盆に一杯乗せた食べ物を分け与えなさい」と言うのでした。

つまり、だいたいどうして目連の母は餓鬼道に堕ちたのかというと、それは、目連の母は我が子目連のことが可愛くて可愛くて仕方がなかった。そのため目連の母は我が子のことだけを思い、周りの飢えている子どもたちには一杯の水すら分け与えることをしなかったのです。その愚かさのために地獄に堕ちていたのでした。

これと同様に、目連が母に食べ物を与えようとしたとき、どうして食べ物が火となり食べることができなかったのかというと、目連も我が母だけに食べ物を与えようとしたから目の前に差し出された食べ物ですら母は食べられることができなかったのです。

つまり、我が子、我が母、そのことだけを思っていたからなのです。

そうでなく、だいたいお釈迦様の教えといいますのは、「自分のことだけでなく、自分の周りのことだけでもない。もっともっと多くの他の人のことをも思いなさい。助け合い、支え合い、つながりを大切にし、みんなと共に生きていきなさい。」これがお釈迦様の教えです。

午後１時からは40人ほどで

自分だけでなく、家族だけでなく、みんなと共に幸せになっていく道を求めなさいというのが仏様の教えです。

これが、先ほどの広島平和祈念式典でのこども代表の言葉『周りの人たちの為にほんの少し行動することが、いずれ世界の平和につながるのではないでしょうか。』あるいはそこに貼ってある「世界中の人々がもう少しやさしくなればこの世界はもっと良くなる。この世界がやさしさに包まれますように。」ということなのです。

今日は隣の部屋で、核兵器のない世界の実現を目指して活動しておられる能代の団体の人たちが原爆パネル展を実施してくださっています。ちょっとでもよろしいので是非ご覧いただけたらと思います。

一日も早く戦争や紛争が終わり、「武器も軍隊もいらない」世の中になりますように。

今日はお参りありがとうございました。

8/17　お墓掃除　ありがとうございます

集会のご案内

聞法とは自分の人生を大切に生きるということです。

教えを聞くことは、心が貧しくならないということです。

私にとって、最も必要なことであり、最も急がなければならないことです。

○親親会
毎月第１金曜　午後７時
蓮如上人の「お文」を中心にした法話。

○婦人十日会
毎月10日　午後１時半
観無量寿経を中心にした法話。

○十五日講
毎月15日　午前11時半
音楽によるおつとめ、法話、お斎。

○宗祖御命日
毎月28日　午前11時半
おつとめ、法話、お斎。
門徒であれば全員集合の日です。当番町によるお斎の接待があります。

○声明教室
随時

どの集まりも、残念ながら人数が多くありません。一人でも多くの参加聞法を願っております。**参加の方へは毎月ハガキ通信おとずれ（短信願勝寺）**でご案内致します。

初参り式 8／22

理実さん お誕生おめでとう

光り輝く明るい未来がやってきますように。

慧登（けいと）は嫉妬深いお兄ちゃんになりました。

覚と百佳に七月二十三日第二子・長女『理実（りみ）』が授かりました。

八月二十二日に初参りを終え、二十八日のお講でお披露目しました。皆様どうぞよろしくお願いいたします。

よろちくでちゅ♥

阿弥陀様も慶んでおられました

十五日講 講員追弔会 9／15

願勝寺では上段『集会のご案内』のとおり、宗祖御命日・二十八日講の他、十五日講も勤まっています。

この後法名前でもお焼香

追弔会に因んだお話を

その講員の追弔会が毎年九月に行われています。北余間に講員の法名軸二幅を掛け、住職・坊守をはじめ参詣者全員が感謝の意を込め法名前でお焼香をし、先輩方に心を寄せています。

編集後記

◎去る９月２日、早朝から降り続く大雨で市内のいたるところで冠水しました。能代地域では３時間で観測史上最大の１０６ミリの降水量を観測したとの事です。皆さんの家屋や周辺は大丈夫でしたか？床上浸水してしまった家は、家財を廃棄しなければならなくなったり、泥の臭いが残ったりと、元に戻すには大変な労力を強いられた事でしょう。

身近に困っている人や家庭があったら、自分でできる範囲でいいので力になる。そんな助け合いの輪が世の中に広まってほしいものです。

10月24日から報恩講が始まります。皆さんお誘いあわせの上、是非。

（石戸谷　記）